

井手元 咲良  
IDEMOTO Sakura



睡庭

油彩、カンヴァス

## 睡庭

私は、これまで身近な風景を元に、目の前で変わっていく時間性やリアルな感覚を写実的描写と抽象的表現を用いてひとつの画面に描くことで、自身が感じた「現象」を絵画に表してきた。そのため、“庭園”という私有地と外界との間に「理想の世界観」を創り出し、現実と想像が融合したとも言える風景に共感を覚え、現在は庭園における自然観や思想などを調べながら自身の思う「理想郷」を描いている。

かつての日本人は、「自然と人間は常に一体」という考え方で、庭園も実用的であった。しかし、時代の流れと共に家屋や庭園も変化し、現代の庭園のほとんどは公共のスペースとして存在することが多い。自然の癒しを求めて庭園を訪れるなど庭園は日常とかけ離れた美的経験を感じさせる場所の1つである。自身の“庭園”との出会いも同じ感覚であった。学部4年の夏の時、鎌倉の報国寺にある枯山水庭園でベンチに腰掛け、小一時間ほど過ごした。目の前に広がる新緑の生き生きとした樹々と共に有機的に配置された石組みの美しい景観、加えて涼しげなそよ風に木のさざめきなど、庭園の「静」と「動」が取り巻く空間に身を置くことで自身の気持ちが安らいだ。

何故、庭園は造られるのか。庭園だけでなく、生花や盆栽など自然の美しさを感じさせるものは多くあるが、それらは人工的な自然であり、自然を美しく表現したものである。人は表現する力を持っており、そこに芸術が存在する。かつての日本庭園が自然の山水をモチーフにしたように、美しい海洋風景や山岳を観るだけでなく、別な視点や形で自然の美を構成するなど、人は自然の美を再現して楽しもうとする“欲求”を持っている。形は違うが、自身もこれまで美しい風景を含めた何気ない日常の風景などを目の前に、その風景から自身が感じた空想などを加えて、違う風景を絵画に展開したいという衝動から制作してきた。このように、庭園を描くことから見えてくる「自然と人工」の関係性を研究しながら今後も制作していきたい。